

(別添)

令和5年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（「学力・学習状況」検証事業）研究
状況報告書

市原市立五所小学校

1 学校紹介

○現在の児童数 239 名

（通常学級 9 学級、特別支援学級 2 学級）

○日本語指導を必要とする児童 23 名

○通常級の中には、必ず日本語指導を必要とする児童が在籍している。日本語指導の職員が、個別に日本語指導を行う時間割を組んでいる。中には、全く日本語がわからない児童もいる。

2 研究主題

算数科における基礎・基本の確実な定着を図る指導の充実
～わかる・できる喜びを実感し、自ら進んで考え表現する子の育成を通して～

3 研究の概要

（1）児童の実態と課題

本校では、「豊かな心をもち、活力あふれる子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、「学びを通した人間形成」を目指して教育活動を推進している。本校の児童は昨年度の学力テストの結果から、全体的に「基礎学力がしっかり定着している」とは言えない。主体的に学習に取り組む児童とそうでない児童の二極化が進み、基礎学力の定着に差が見られる。また、外国籍の児童、家庭環境に問題を抱えている児童が多いなど、本校独自の実態も影響していると思われる。学校全体の基礎・基本の確実な定着が課題である。

（2）学力向上のための取組

昨年度より本校では、市原市教育委員会の指定を受け、研究主題を「『算数科における基礎・基本の確実な定着を図る指導の充実』～わかる・できる喜びを実感し、自ら学び進んで考え表現する子の育成を通して～」として、実践を積み重ねてきた。基礎・基本の確実な定着を図るために、指導方法や教材の工夫について校内研修を通して学校全体で取り組んでいる。また、授業改善のために「学習指導過程の中で、課題を明確にする工夫をし、児童が自らの課題と自覚できるようにすることで、授業を通して『わかる』『できる』喜びを実感できるようにすること」「課題解決の過程で、自分の言葉で表現する活動を取り入れることで、自ら進んで考え、表現することなどを通して、基礎・基本の確実な定着を図ること」の2点を意識し、研究を行ってきた。

本年度は、さらに「広げ深める場面」と「まとめあげる場面」に着目し、教材や発問の工夫をしたり、振り返りやまとめを重視したりすることで、「主体的・対話的で深い学び」につながるような授業改善を行い、自ら学び進んで考え表現する児童を育成したいと考えている。

（3）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

本校は、少人数指導・基礎学力定着特別講師、県学習サポーター、市学習サポーターが配置されている。特に、算数を中心に、次のように学習を行っている。

①1年生、2年生について

少人数指導・日本語指導教員・市学習サポーターによるティーム・ティーチングで学習を進めている。必ず複数の職員で授業展開ができるように教育課程を編成している。

②3年生～6年生について

少人数指導・基礎学力特別講師・県学習サポーターによる少人数指導を行っている。クラス分けは習熟度別で行っている。それぞれ、10人前後の人数で授業を行っている。特に、学習が苦手なクラスは少ない人数での学習ができるようにクラス分けを行っている。

③放課後の補習教室

毎週月曜日、火曜日、水曜日に行っている。正課日課が終わった後の30分間を算数の補習時間としている。対象学年は以下のとおりである。

○月曜日・・・5・6年生対象

○火曜日、水曜日・・・3・4年生対象

また、夏休みの長期休業にも希望者を募り今年度は3日間実施した。

4 成果

【全体】

○授業研究はもちろんのこと、普段の各教科の授業でも「広げ深める場面」と「まとめあげる場面」に着目し、教材や発問の工夫をしたり、振り返りやまとめを重視したりすることで、「主体的・対話的で深い学び」につながるような授業改善を行ってきた。それに伴い、教職員全体で子供の育みたい資質能力を共通認識し授業をしている。そのため、「できる、わかった」という児童が増えてきている。

○基礎基本の定着を図るために、「五所スタンダード」として、授業の流し方、板書の仕方、ノートの取り方、小テストなど1年生から6年生まで統一することにより、児童は学習の仕方を理解し、意欲的に授業に取り組んでいる。

【加配教員の活用】

○多くても15人程度、少ないと8人程度で授業を展開することができ、非常に目が行き届く状態で学習を進めることができた。

○児童に声をかける機会が増え、声をかけてもらうことで児童が意欲的に学習に取り組み、学習が苦手な児童も、学習を理解できる機会が増え、学力もついた。

○同じ内容の授業を展開する三者で放課後等の少ない時間でも、必ず話し合う時間が生まれた。

○よりよい進め方や手立て等を毎回確認しながら授業を進めることができた。

○事前の実態調査によって、自分のペースにあったスピードで学習を進めることができた。特に、学力だけでなく、本人の希望を取るのがよかった。

5 今後の課題

○ティーム・ティーチングや習熟度別で授業を行っているが、学習が苦手な児童や日本語がわからない児童など、学習の理解度に差がとともある。そのような差を少しでも埋めるために、今年度より毎週火曜日の昼休みは学習の時間とし、個別に指導できるような体制をとっている。その成果は今後出てくるのではないかと考える。

○タブレットの活用には、まだまだ研究不足なところがある。タブレットを使うためにどういった学習を進めていくかということを考えるのではなく、授業の内容を理解させるためにタブレットをどう使うかを考えて使っていかなければいけない。